カケル

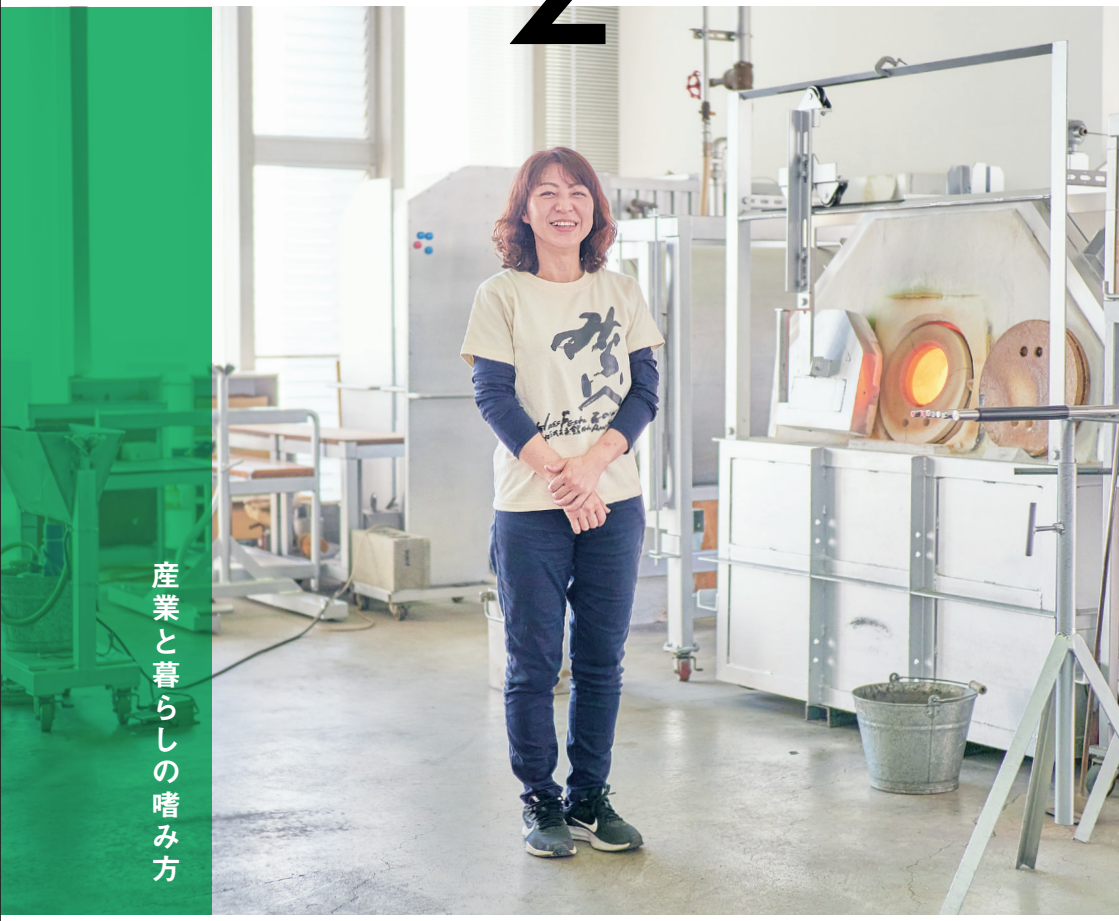
vol. 2

山陽小野田市

kakeru

ゆめはくカフェ通信

July 2021 **2** Sanyo-Onoda



産業と暮らしの嗜み方

藤原徹平
（建築家）

×

池本美和
（ガラス造形作家）

山口県周波数利用拡張
山口ゆめ回廊博覧会
YAMAGUCHI YUME KAIRO EXPO

ゆめはくカフェとは

山口ゆめ回廊博覧会が開催される山口県央連携都市圏域の
７市町をつなぐリレー形式のトークイベントです。
地域ホストはそれぞれのエリアで活躍するキーパーソン、
ゲストは圏域外で活躍するアーティストやクリエイター。
両者が各地域のとっておきの場所を会場に語り合い、
地域の魅力を掘り起こしていきます。
カフェでくつろぐように、楽しいおしゃべりに耳を傾けてください。

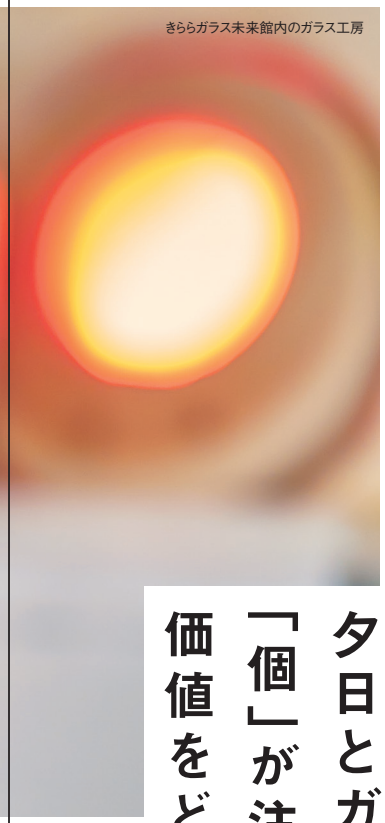
そんなイベントの模様を収録した『ゆめはくカフェ通信 kakeru』。
ゲスト×地域ホストの“かける”と
７市町に七色の虹を“かける”イメージから名付けました。
トークとともに、その土地の持ち味を存分にお届けします。

山口ゆめ回廊博覧会　2021年７月～12月

山口県央連携都市圏域（山口市、宇部市、萩市、防府市、美祢市、山陽小野田市、島根県津和野町）で開催する、地域の特徴をいかした周遊型博覧会です。愛称は『ゆめはく』。特別な場所で体験するアートと食のコラボレーションや、普段は見ることができない場所を案内するスペシャルなまち歩きなど、「いま・ここ」でしか体験できないゆめはくに参加しよう!

公式Webサイト　https://yumehaku.jp

焼野海岸の夕日とソル・ボニエンテ



きららガラス未来館内のガラス工房

ゆめはくカフェ　vol. 2

「産業と暮らしの嗜み方」

2021年5月23日　きららガラス未来館（山陽小野田市）

地域ホスト・池本美和さんの活動拠点であり、
ゲストの藤原徹平さんとも縁のある、きららガラス未来館。
豊かな自然と調和するその場所、
町を軸に繰り広げられた4人のオンライントークです。
恵まれた自然とこの土地が持つ産業的な歴史を大事にしつつ
町のなかでものづくりをする楽しさから、
変化する多種多様な個の暮らしとその地域でしか体験できない
価値を生み出す発想まで、話は大きくふくらみました。

藤原徹平
（建築家）

×

池本美和
（ガラス造形作家）

今日とガラスと町おこし。
「個」が注目される時代の
価値をどう生み出すか。

ゲスト

藤原徹平　Fujiwara Teppei

1975年神奈川県生まれ。建築家としてだけでなく、多様な領域を越境するアートフェスティバルの企画やまちづくり、教育プログラムのデザインに関わる。主な作品に〈等々力の二重円環〉、〈代々木テラス〉、〈稲村の森の家〉。著書に『7inch Project〈#01〉Teppei Fujiwara』など。受賞に横浜文化賞文化・芸術奨励賞、日本建築学会作品選集 新人賞、日本建築士会連合賞奨励賞、東京都建築士会住宅建築賞など。2012年より横浜国立大学准教授、2013年より宇部ビエンナーレ運営委員・選考委員・展示委員を務める。

地域ホスト

池本美和　Ikemoto Miwa

1972年広島県生まれ。山陽小野田市在住ガラス造形作家。きららガラス未来館では講師を務め、地域振興まちづくりの一環として、756人によるガラス絵画設置（山陽小野田市民病院）等参加型ガラス体験イベント企画をおこなう。また作家活動は吹きガラスによって建築空間への作品設置やテーブルウェア制作を手がける。主な作品は、銀座レカン、シャンデリア、ANAインターコンチネンタルリゾート石垣アートワーク制作など。第1回現代ガラス展in山陽小野田準大賞受賞。第5回現代ガラス展よりスーパーバイザーを務める。
https://ikemoto-miwa.com/

自然と歴史が織り成す
山陽小野田市の魅力

―― BEPPU PROJECTの山出です。第2回目の『ゆめはくカフェ』は、建築家の藤原徹平さんをゲストに迎え、地域ホストにガラス造形作家の池本美和さん、山口ゆめ回廊博覧会クリエイティブディレクターの服部滋樹さんを加えた4人で、地域の魅力を発掘しながら、未来をつくるためのヒントを見つけていきたいと思います。早速ですが、池本さんから見た山陽小野田市の魅力を教えていただけますか？

池本　やはり何といってもきれいな夕日です。焼野海岸の『きららビーチ焼野』から見る夕日は『日本の夕陽百選』に選ばれるほどの美しさです。このあたりは、景観に優れた海岸の特徴をいかしながら、施設や道路の整備により、新たなレクリエーションリゾートゾーンをつくる『焼野海岸C.C.Z.(コースタル・コミュニティ・ゾーン)整備事業』の一環として造成されました。周辺にはフェニックスの木が植えられており、リゾート地のような雰囲気が漂っています。海岸沿いには、スペイン料理のレストラン『ソル・ポニエンテ』、宿泊研修施設の『きらら交流館』、生涯学習施設の『きららガラス未来館』、さらに裏手の山には『竜王山オートキャンプ場』があります。ちなみに、ソル・ポニエンテときららガラス未来館は、『国立競技場』の設計でも知られる建築家・隈 研吾さんが手掛けられたものです。

――藤原さんは隈さんの事務所に在籍されていたそうですね。

藤原　隈研吾建築都市設計事務所に入社してのころ、作品集制作のためにソル・ポニエンテを訪れました。美しい夕日に包まれながら食事をして、「建築って素晴らしいな」と実感したのをいまでも鮮明に覚えています。在籍中には『下関市川棚温泉交流センター 川棚の杜』と下関市安養寺の境内にある『木造阿弥陀如来坐像収蔵施設』の設計を担当しました。近年は、彫刻家の登竜門として知られる『UBEビエンナーレ(現代日本彫刻展)』の運営委員も担当させていただいています。

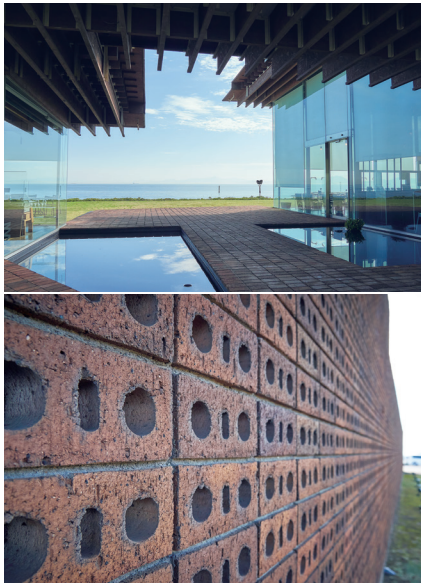
――ソル・ポニエンテを設計された経緯についてご存知ですか？

藤原　山陽小野田市の総合商社である富士商さんが、地元をもっと盛りあげていきたいということで、事務所に相談に来られたのがきっかけだったと聞いています。隈さんは、九州をバックに夕日を見ることができる絶好のロケーションと、地域の発展のために取り組まれている人々の情熱に心を突き動かされて、「ぜひ成功させたい！」とかなりの力を入れて設計に取り組まれたそうです。

南欧のリゾート地のようなお洒落な雰囲気を漂わせる焼野海岸。海水浴やマリンスポーツ、散歩など、四季を通じて市民の憩いの場となっている。海と道路の間に、レストランや宿泊施設などの建物があるのは、全国的にも珍しいケース

服部　ソル・ポニエンテは、スペイン語で「夕日」の意味だとお聞きしました。建物のシルエットにより、さらに印象的な風景が生み出されていると思います。夕日というステージを見るための特等席が、ここに用意されているようです。

池本　私も初めて焼野海岸を訪れたとき、何て素敵な場所なのだろうと感動しました。なかでも、日没前後に太陽が赤やオレンジ色に輝くマジックアワーとよばれる時間帯が最高にきれいです。季節や天気によって、いろいろな表情を見せてくれるので、どれだけ眺めていても飽きることはありません。ガラス作品を制作するうえでも、この素晴らしい景色に大きな影響を受けています。



焼野海岸に面したレストラン『ソル・ポニエンテ』は、建築家・隈研吾さんの設計によるもの。ガラス張りの店内、レストランとカフェの間の通路が、空と海、陸が一体となった開放的な空間を演出。建物の正面には、山陽小野田市の窯業の歴史を物語る赤茶色の有孔レンガが使われている

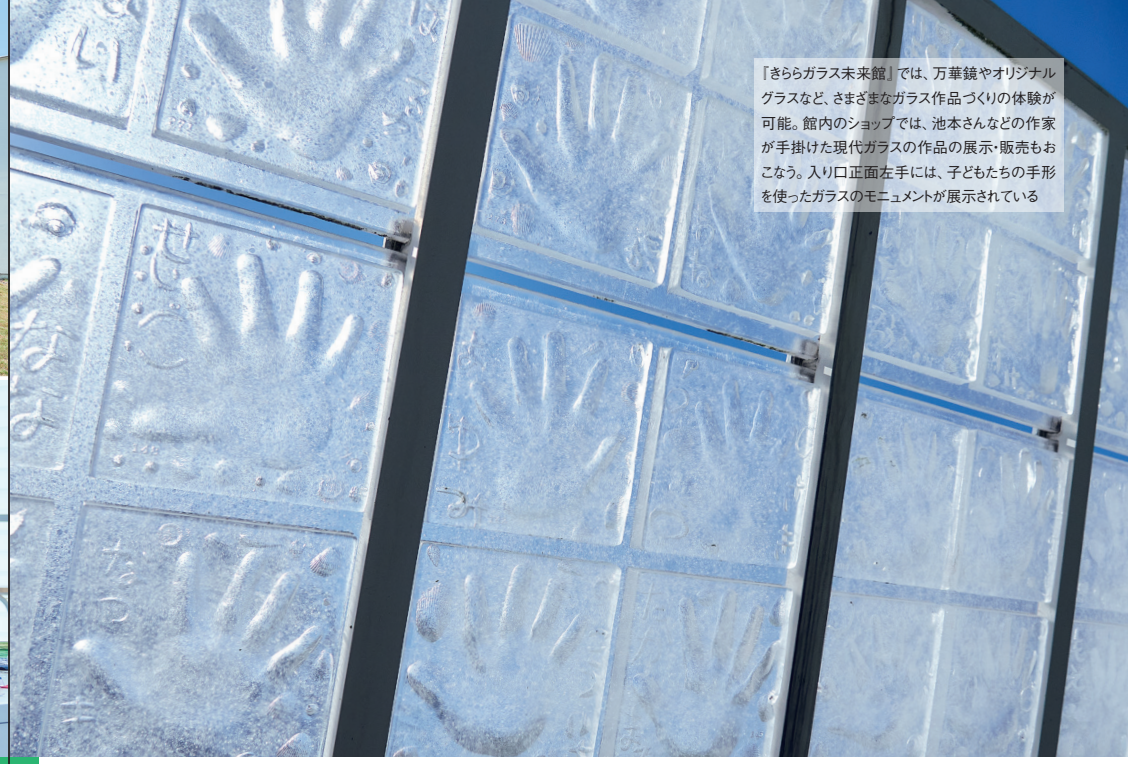
――池本さんは、山陽小野田市に移住される前はどちらにお住まいだったのですか？

池本　富山県富山市です。富山ガラス造形研究所を卒業後、富山ガラス工房に就職しました。3年経ってそろそろ独立しなくてはいけないと考えていたとき、山陽小野田市で開催される若手ガラス作家のコンペティションの話を聞きつけました。

――どうして移住しようと思われたのですか？

池本　セメントの町として栄えた山陽小野田市は、実は6世紀後半には須恵器、明治時代には硫酸瓶を生産するなど、古くから窯業の町として発展してきました。そういった歴史的な背景から、山陽小野田市出身の現代ガラス造形作家・竹内傳治先生が、窯業の1つであるガラスで町おこしをしようと、若手ガラス造形作家の育成を目的にしたコンペとガラス工房の設置を発案されました。コンペの審査は無事終了したのですが、残念なことに2001年の展覧会『第1回現代ガラス展 in おのだ(現在の現代ガラス展in山陽小野田)』の開催を目前に、竹内先生がご病気でお亡くなりになってしまって…。ガラス工芸による町おこしという話が消えてしまいそうになりました。このまま先生の遺志を継ぐ人が現れなければ、計画自体が白紙になる可能性もでてくると考えて、山陽小野田市に移住することを決めました。見ず知らずの土地に行くのは心細かったのですが、それよりも町の人々の期待に応えたい、素晴らしいロケーションの中で新しいことに挑戦してみたいという気持ちが上回りました。

藤原　隈さんがソル・ポニエンテにレンガを採



『きららガラス未来館』では、万華鏡やオリジナルグラスなど、さまざまなガラス作品づくりの体験が可能。館内のショップでは、池本さんなどの作家が手掛けた現代ガラスの作品の展示・販売もおこなう。入り口正面左手には、子どもたちの手形を使ったガラスのモニュメントが展示されている

用したのも、窯業という町の歴史を踏まえてのことだったのですね。いまやっと、地域の産業から生まれた風景だと理解しました。

市民との協働で ガラス文化を発信

――池本さん、きららガラス未来館はどのような施設なのですか？

池本　山陽小野田市のガラス文化の交流拠点・情報発信拠点として、2004年にオープンしました。現在は、所属ガラス作家のガラス作品の展示販売と、とんぼ玉やガラスアクセサリー制作などの7つの体験をすることができます。

――体験することで、より一層ものづくりを身近に感じてもらえそうですね。どのような方が利用されているのですか？

池本　小さなお子さんから年配の方まで、幅広い年齢層の方々が利用されています。何度もリピートされるコアなお客様も多いですね。萩市から通ってくださっているご夫婦は、作品ができあがるまでの時間に、海の音に耳を傾けたり、作家とおしゃべりをしたり、作品制作以外の時間も楽しまれています。行き帰りのドライブも含めてちょっとした旅行気分を味わっていらっしゃるようです。また、夏休みシーズンには、自由研究とキャンプをセットで楽しまれるご家族もいらっしゃいます。

――そのほかにも何か取り組んでいらっしゃることはありますか？

池本　2005年におこなわれた国民文化祭のプレイベントでは、15cm角のガラスに描かれた、小学生の絵550人分を組み合わせて、縦3m、横6mの巨大な夕日のガラス壁画を制作しました。2006年の国民文化祭では、市内311人の5歳児の手形を使って、未来に羽ばたく翼をイメージしたガラスのモニュメントを作成しました。先日、体験された方が自分のお子さんを連れて、「これはお母さんが小さいときに体験したものだよ」と話されているようすを見て、とても嬉しくなりました。そのほかにも、山陽小野田市民病院の2階には、市民のみなさんと一緒に作った、縦1.2m、横5.4mの竜王山と厚狭川のモザイク画が展示されています。

現在は、山陽小野田市に建設中の保育所に設置するガラス絵画を、地域の未就学児と一緒に制作する準備をすすめています。今後も、市民のみなさんと協働しながら、山陽小野田市の宝となるような活動を続けていきたいと思います。

服部　作家と市民が一緒になってものづくりを体験する機会があって、その作品が多くの人が目にする場所に飾られる。そして、見るたびに楽しかった記憶がよみがえる。本当に素晴らしい活動だと思います。このような地域とつながる力が、産地としての強みになるのだと感じました。

ヨーロッパでは赤ちゃんに銀のスプーンをプレゼントするファーストスプーンいう風習があります。昔、銀はとても高価だったため、銀のスプーンを贈ると、一生食べ物に困らない人生を送ることができるとされていました。また、銀は魔除けの力があるともいわれています。

同様に、北海道東川町には『君の椅子』プロジェクトがあります。旭川家具の主要産地の1つである北海道東川町では、生まれてくる赤ちゃんに、地元の家具職人が作った椅子をプレ

YUMEHAKU-CAFE vol.2 Sanyo-Onoda

ゼントしています。「手作りの椅子を通じて、子どもの誕生と成長を分かち合いたい」という思いがこめられているそうです。これらに倣って、誕生記念のガラス製品がきららガラス未来館から生まれる、というアイデアはどうでしょう？

池本　実は数年前から、小さなお子さんを対象とした「エナメル絵付け体験」を実施しています。お子さんの手や足にガラス専用の絵の具を塗り、ガラスのお皿に押し当て、それを動物に見立てたり、周りに可愛くデコレーションしたりして、世界に1枚だけの愛情たっぷりのプレートを完成させます。クチコミで徐々に人気が高まり、お子さんの誕生祝いや七五三の記念など、いろいろなシーンで利用されています。予約なしで体験ができて、完成品は後日発送も可能です。この記念プレートが、山陽小野田市で生まれた全てのお子さんにプレゼントされるといいなと考えています。そうすれば、山陽小野田市＝ガラスの町のイメージが、定着していくのではないかと思います。

上: 2005年に開催された国民文化祭のプレイベントで、市内の小学生と一緒に制作した巨大な夕日のガラス壁画／下: 人気沸騰中の子どもの手形・足形をアレンジしたガラスプレート。誕生祝いや七五三のお祝いにもおすすめ

さまざまなつながりで地域を活性化させる

――今後、地域においてどのような取組が必要になってくると思われますか？

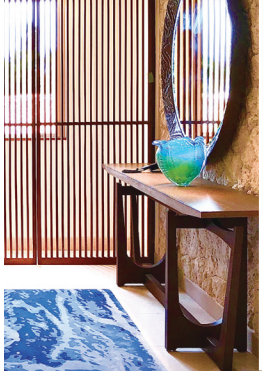
服部　これから産地が発展していくためには、地域と個人が直接つながるような仕組みを生み出すことが重要ではないでしょうか。ものを大量に作って大量に売るのではなく、もっとニッチな市場にフォーカスして、少量多品目で展開を図る。そのためには、いままでよりもさらにお客さんの声を聞くことが必要になってきます。それぞれのニーズに応じた多種多様な商品や暮らし方が生まれてくれば、それが町の個性となり、そこから地域がどんどん変わっていく気がします。

藤原　多種多様な暮らし方が増えていくと、面白いことがどんどん生まれてきそうですよね。従来のやり方にとらわれずに、視野を広く持つことで、表現や活躍の場はさらに増えていくのではないでしょうか。

―― 1つの肩書きに収まらない「スラッシャー」と呼ばれる生き方ですね。

服部　これまでは、本業のほかにする仕事は「副業」と呼ばれてきましたが、収入の低さを補うためのものというネガティブなイメージに捉えられがちでした。それに対して、「スラッシャー」という言葉は、複数の肩書きを持つことをポジティブに表現した言葉です。これは、メインが本業、サブが副業といった考え方ではなく、複数のスキルや経歴を横断して、多様なキャリアを形成する働き方です。

藤原　僕も、本業の建築設計のほかに、大学で講義をしたり、フィールドワークで町の歴史を調べたり、町おこしを手伝ったりしています。これからは、こういった複数の仕事を掛け持ちすることが主流になっていくのではないかと思います。



左: 池本美和《Water Moon》2020年　右: 池本美和《Seidan》2019年

ガラス造形作家として、山陽小野田市はもとより全国で活躍中の池本美和さん。日常使いのテーブルウェアや花器などのガラス作品のほか、有名レストランやホテルなどのアートワークも手掛けている

そこでしか味わえない産地としての強み

――今後、ものづくりにおいて何が大切になっていくと思われますか？

服部　従来のものづくりは、社会の課題与件に合わせてリサーチをベースに積み上げていく「フォアキャスティング」が主流でした。この方法は、現状の強みを生かした実現性の高いアイデアを考え出す際には有効です。ただし、どうしても過去からの延長線上に未来を描くことになるため、革新的なアイデアは生まれにくい。そこで今後は、既存の方法では解決できない問題に対して、未来のあるべき姿から逆算して考える「バックキャスティング」という考え方がものづくりにも求められるようになっていくのではないでしょうか。いかにブレずに自分のやっていることを信じ続けられるかが、さらに重要になってくると思います。

藤原　今よりもさらに“個”に焦点があたる社会になっていくのではないでしょうか。オンラインで簡単にものが買える時代だからこそ、買い手はものが生まれる背景に注目しています。どんな環境で育ったのか、日頃どんなことを考えて作っているのか、地域のどんなところを面白いと思っているのかなど、作家の人となりを伝えていってはどうでしょう？　人それぞれに個性的な人生があるので、それが前面に出るようになれば、地域としての強みにつながっていくと思います。

池本　いまのお話を聞いて、きららガラス未来館もそれぞれの作家の個性をもっと発信していく必要性があると感じました。今後はSNSを使った情報発信にも積極的に取り組まないといけないですね。

――コロナの影響で、人々の価値観が変わり、豊かな暮らしへの意識が高まってきていますよね。

藤原　そうですよね。居心地のいい家があって、豊かな畑があって、親しい隣人がいる。海を眺めながら、釣った魚をあてに、おいしいお酒を飲む。今まで当たり前だと思っていた何気

ない普段の生活が、実はとても幸せだということに、みんな気づき始めたのだと思います。

仕事をするうえでも、そういった豊かな感覚をどのように伝えていくのかが重要になっていくと思います。僕の仕事である建築でいえば、「揺るがない本質的な価値」をいかにして表現するかを求められているような気がします。

服部　家族と過ごす時間が増えたことで、居心地がいいとか、楽しいとか、充実しているとか、そうした体験がより重視されるようになった気がします。藤原さんがおっしゃるように、今まで見過ごしてきた価値がより大切になってくるのではないでしょうか。

藤原　そういう意味では、山口県の暮らしってとても豊かですよね。温泉がたくさんあって、どこに行っても景色がきれいで、住みやすい。魚の鮮度にも安さにも驚きます。恵まれた環境なので、都会に住んでいる私から見ると羨ましい限りです。

――話は変わりますが、池本さんは今後やってみたいことがありますか？

池本　2年前から館内にショップを設置して、ガラス作品の展示販売を始めたのですが、まだきららガラス未来館として統一したデザインのものがありません。ガラス工芸の産地としてさらにPRしていくためにはアイコンが必要だと考え、現在、関係各所と話し合いをしているところです。将来的には、竹内先生が考案された『スタッキンググラス』のような、人々に長く愛され続けるものを生み出したいです。

――地域の強みがますます増していきそうですね。

服部　地域で暮らす感覚を味わえると、さらに山陽小野田のことを好きになってもらえそうですよね。滞在してもらうことで、より住みたい、暮らしたいと思っていただけるのではないでしょうか。地域の交流人口を増やすために、時々立ち止まってその土地に流れる時間を感じられるようなプログラムやプロジェクトをたくさん実施してみるのも1つの方法ではないかと思います。

信楽焼で有名な滋賀県信楽市には、世界中の陶芸家が一定期間滞在して作品制作をおこなう『滋賀県立陶芸の森』という施設があります。年間で約60組のアーティストが滞在しているのですが、美術館の外に出て活動する人はほぼいませんでした。そこで、地域との交流を図る仕組みを考え直した方がいいのではという話がでています。たとえば、民家を改修して町なかに滞在してもらうとか、海外からシェフを呼んで自分の料理のイメージに合う器を窯元で作ってもらうとか、そんなことを考えています。

これに倣って山陽小野田市にも、ガラス作家のアーティスト・イン・レジデンスのようなプログラムがあるといいのではないでしょうか。料理人と一緒に料理に合うお皿を作ったり、バーテンダーと一緒にお酒に合うグラスを作ってもらったりと、違う職種とコラボレーションすることで、そこに集まる人が変わってくる。新たな視点が加わることで、可能性が広がっていくように思います。

第1回に引き続きオンラインでの開催となった今回。地域ホスト・池本さんの活動拠点である山陽小野田市をテーマに、全国で活躍中の4人がトークを展開。恵まれた環境と歴史をいかした町おこし、交流人口を増やすためのアイデアなど、多彩な話題で盛りあがりを見せた

藤原　最近『まちやど』というカルチャーが全国で増えてきています。これは、まちを1つの宿に見立てて、宿泊施設や飲食店、銭湯といった地域資源をつないで、地域ならではの日常を体験する仕組みです。地域を面でとらえて個々の強みをいかしながら、地域全体でおもてなしする。1人であれもこれも実現するのは難しいので、こうした新しい仕組みを取り入れても面白いかもしれません。

地域の1次産業との連携を模索するのも1つの方法だと思います。たとえば、農家さんが持ってきた果物をその場で絞ってガラスの器に入れて提供する。そうすれば、東京には出荷できないものになります。産地でしか体験できない絶対的な強さ、地域の外に出荷できない価値をどうやって生み出していくのかを、いろいろな生産者と共に考えるといいのかなと思います。

池本　お話を聞いて、まだまだ工夫次第でできること、地域にいろいろな可能性があることに気づきました。きららガラス未来館の近くには、きらら交流館や竜王山公園オートキャンプ場もあります。そうした周辺施設との連携も深めて、地域全体をもっと活性化していけたらいいなと思いました。

――今回のトークイベントを通じて地域を盛り上げるさまざまなアイデアが生まれたのではないでしょうか。パネリストのみなさん、ありがとうございました！

◎きららガラス未来館
〒756-0877 山口県山陽小野田市大字小野田7534-4
（山口県山陽小野田市焼野海岸）
アクセス：JR長門本山駅から徒歩5分／焼野バス停から徒歩3分
https://www.onodaglass.jp/

進行役
山出淳也　Yamaide Junya
1970年生まれ。NPO法人BEPPU PROJECT代表理事、アーティスト。文化庁在外研修員としてパリに滞在（2002～04年）。アーティストとして国際的に活躍した後、2005年にBEPPU PROJECTを立ち上げ現在に至る。混浴温泉世界実行委員会 総合プロデューサー（2009年～）、第33回国民文化祭・おおいた 市町村事業 アドバイザー、文化庁審議会 文化政策部会 委員（第14期～16期）、グッドデザイン賞 審査委員（2019年～）、山口ゆめ回廊博覧会コンダクター（2019年～）・平成20年度 芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞（芸術振興部門）。

聞き手
服部滋樹　Hattori Shigeki
1970年生まれ、大阪府出身。京都芸術大学芸術学部教授、クリエイティブユニットgraf代表、クリエイティブディレクター、デザイナー。建築、インテリア、プロダクトに関わるデザインや、ブランディングディレクションなどを手がける。デザインリサーチからコンセプトを抽出し、地域や社会基盤もその領域として捉え、仕組みの再構成と豊かな関係性を生み出すコミュニケーションをものづくりからデザインする。プロジェクトからプログラムへ、ムーブメントからカルチャーへ育むデザインを目指している。

わたしのオススメ

池本美和
（ガラス造形作家）

スポット

本山岬公園　くぐり岩

山陽小野田観光協会事務局
山陽小野田市日の出1-1-1（山陽小野田市役所 シティーセールス課内）
Tel. 0836-82-1313
［営業時間］8:30～17:15　［定休日］土・日曜日、祝日
http://sanyoonoda-kanko.com/

SNS上で話題のパワースポット。本山岬公園の駐車場から坂道を下って海岸へ出ると、干潮のときだけ、縞模様が幾重にも重なった大きな岩々が現れます。なかでも岬の先端にある「くぐり岩」は、遠目からでもわかる圧倒的な存在感。日没とタイミングが重なると、神々しさが増してさらに運気がアップしそうです。2月下旬と9月下旬の約1週間にかぎり、岩に空いた大きな穴に夕日が差し込む幻想的な風景が楽しめますよ。

スポット

Sol Poniente

ロケーションも居心地も抜群のレストラン。味はもちろんのこと、見た目も美しい料理の数々に、いつもテンションがあがります。夕暮れ時ももちろんいいですが、海や空の移り変わるようすをのんびりと眺められる昼間にも、ぜひ行ってみてほしいですね。私のお気に入りは2階席。いつも遠くの景色を眺めながら、開放的な気分に浸っています。

Sol Poniente（ソル・ポニエンテ）
山口県山陽小野田市小野田760　Tel. 0836-89-0080
［営業時間］ランチタイム　平日: 11:30～14:30、土日祝: 11:00～14:30
ディナータイム　平日: 17:30～20:30、土日祝: 17:00～20:30
［定休日］月・火曜日　https://www.sol-poniente.co.jp/

グルメ

海のパン屋さん　Pan de molde

きららガラス未来館のお隣にあるパン屋さん。とにかく種類が豊富で、いつもどれにしようか迷ってしまいます。なかでも絶対にはずせないのがレーズン食パン。硬すぎず柔らかすぎない、何ともいえない絶妙なしっとりとした食感が私好みなんですよね。焼き上がってすぐに売り切れてしまうほどの人気なので、前日までの予約をおすすめします。

海のパン屋さん　Pan de molde（パン・デ・モルデ）
山口県山陽小野田市小野田7534-9　Tel. 0836-89-0618
［営業時間］7:30～18:00（売り切れ次第終了）
［定休日］日・月曜日

ゆめはくカフェのご案内

ゆめはくカフェ YUMEHAKU-CAFE

配布中！ kakeru vol.1

1 山口市

「芸術文化のコミュニティ・派生するサロン」

2021年5月15日（土）　会場: 阿東文庫（オンライン配信）

室町時代の大内文化を受け継ぎ、今も芸術・文化が盛んな山口市。市内に数多くある芸術・文化に関連した施設やコミュニティの活動を知り、それぞれの役割や関係性、今後の連携について考える。

藤 浩志
（美術家・秋田市文化創造館館長）
×
明日香 健輔 ・ 渡邉朋也
（阿東文庫）　（YCAM）

配布中！ kakeru vol.2

2 山陽小野田市

「産業と暮らしの嗜み方」

2021年5月23日（日）　会場: きららガラス未来館（オンライン配信）

日本の夕陽百選にも選ばれた焼野海岸や見事な地層や岩場が見られる本山岬公園、九州・四国までも望める竜王山公園など、美しい景観に恵まれた山陽小野田市。この地に移住し活動を続けるガラス造形作家と気鋭の建築家が、地域の産業とそこに暮らす魅力を語らう。

藤原徹平
（建築家）
×
池本美和
（ガラス造形作家）

掲載誌 kakeru vol.3

3 美祢市

「楽しみを発掘する」

2021年6月12日（土）
会場: 秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL（オンライン配信）

広大なカルスト大地や鍾乳洞などを資源とした観光が盛んな美祢市。「誰もが3億年の旅をしたくなる」をコンセプトに、原付バイクの貸し出し、ケイビングツアーといったアクティビティを提供するゲストハウス＆カフェバブTRIP BASE COCONEELを事例に、地域の楽しみ方の発掘・創出について語り合う。

梅原 真
（デザイナー）
×
松田寛之
（秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL）

掲載誌 kakeru vol.4

4 萩市

「旅と交流」

2021年6月19日（土）　会場: 萩ゲストハウス ruco（オンライン配信）

江戸時代の地図がそのまま使える城下町・萩市のゲストハウスrucoで、旅と交流をテーマにトーク。宿泊客にはリピーターも多く、移住してくる人もいるというrucoの事例から、人との交流や旅をすることで生まれるものについて話す。

松浦 弥太郎
（エッセイスト・クリエイティブディレクター）
×
塩満直弘
（萩ゲストハウス ruco）

掲載誌 kakeru vol.5

5 防府市

「発酵・日々たべること」

2021年6月26日（土）　会場: お茶室 芳松庵（防府天満宮内）

毎日の食卓に欠かせない醤油や味噌などの醸造業が盛んな防府市。家で過ごす時間が増え、日常の何気ないことがかけがえのないことになった今、食にまつわるあれこれをテーマにトークする。

高山なおみ
（料理家・文筆家）
×
光浦 健太郎
（光浦醸造）

掲載誌 kakeru vol.6

6 津和野町

「医食同源」

2021年7月10日（土）　会場: 糧（医食の学び舎 旧畑迫病院内）

会場は、津和野町の国指定名勝旧堀氏庭園の一部として文化財指定された、旧畑迫病院で運営される医食同源をコンセプトとした場。津和野の暮らしや医食同源を体現して見えてきたもの、これから目指すものをテーマに語る。

稲葉俊郎
（医師・医学博士）
×
大江健太
（糧）

掲載誌 kakeru vol.7

7 宇部市

「伝統から紐づく暮らし」

2021年7月18日（日）　会場: igual coffee（永山本家酒造場2F）

自然と産業がバランスよく混在する宇部市。そこで明治から続く永山本家酒造場が大切にしてきたものや地域との関わりを知るとともに、遺したい伝統や景観、受け継がれていく産業と生活、そこに住む人たちの幸せについて考える。

田中元子
（株式会社グランドレベル代表取締役社長・喫茶ランドリーオーナー）
×
永山貴博
（永山本家酒造場）

次号予告

kakeru vol.3は2021年8月12日の発行です。
「楽しみを発掘する」　梅原 真（デザイナー）× 松田寛之（秋吉台ゲストハウス TRIP BASE COCONEEL）

ゆめはくカフェ通信『kakeru』は公式Webサイトからダウンロード可能です ▶ https://yumehaku.jp

山口ゆめ回廊博覧会　PICK EVENTS

山陽小野田市
Sanyo-Onoda

ゆめはくでは地域の特徴をいかしたイベントがもりだくさん！
特別な場所で体験するアートと食の夢のコラボレーションや、
普段は見ることができない場所を案内するスペシャルなまち歩きなど、
ゆめはくで「いま・ここ」でしか体験できないイベントをお楽しみください。

日本の最新ガラスアートを俯瞰する。
創立50年記念「'21日本のガラス展」巡回展

10月10日(日)―12月20日(月)
※毎月第1・3火曜休館、11月15日(月)は展示作品入れ替えにより閉場
不二輸送機ホール

日本ガラス工芸協会の主催で3年ごとに開催される
「日本のガラス展」の巡回展が、
中四国地方で初めて山陽小野田市で開催されます。
日本ガラス工芸協会の会員によるガラス造形作品
約100点を約2か月に渡り展示します。

ガラス作品を鑑賞してスタンプを全部集めよう！

ガラスアートフェス in 山陽小野田

7月16日(金)―12月26日(日)　きららガラス未来館　その他市内施設9ヵ所

山陽小野田市が所有するガラス作品を展示したミニギャラリーとスタンプラリーポイントを市内10か所に設け、
作品を鑑賞しながらスタンプを集めるイベント。スタンプを全て集めると、抽選で記念品をプレゼントします。

キラキラした華やかな休日はいかが。

世界に一つだけのガラス作品づくり &
おしゃれなレストランでティータイム

7月18日(日)、9月25日(土)、10月9日(土)、11月13日(土)　※1週間前までに要予約
きららガラス未来館

世界に一つだけのガラス作品は、一生の宝物になること間違いなし。
個性豊かな作品を制作する作家の指導のもと、上品で美しい作品づくり体験を。
体験後は、移り変わる海と空の景色を眺めながら、
作家制作のガラス皿でいただくデザートと作家とのトークをお楽しみください。

その他のイベントはこちら

公式Webサイト
https://yumehaku.jp

［新型コロナウイルス感染予防対策実施について］各種イベントは新型コロナウイルス感染症への対策を十分に施したうえで実施します。
また、状況に応じて随時イベントの開催可否・内容変更を検討し、変更した内容は公式Webサイトでご案内いたします。

YUMEHAKU-CAFE vol.2 Sanyo-Onoda

kakeru
ゆめはくカフェ通信

カケル　vol.2　Sanyo-Onoda　　2021年7月22日発行

発行元: 山口ゆめ回廊博覧会実行委員会事務局(山口市交流創造部山口ゆめ回廊博覧会推進室内)
〒753-8650 山口市亀山町2-1 Tel. 083-934-4152
企画: 特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT　制作: 株式会社 野村デザイン制作室
編集: 廣石正樹(be:spoke)　アートディレクション&デザイン: 野村勝久　ライター: 小野理枝
撮影: 江本 悟(SARUTO Inc.)　コピーライター: 大賀郁子　デザイン: 岡田一星
イラストレーション: 山内庸資　印刷: 大村印刷株式会社